

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	佐々木康寿・新美友章
		発行人	服部 重昭
		印刷所	株式会社 クイックス

「ご挨拶と近況報告」

名古屋大学農学部同窓会 名誉会長 松田 幹
(農学部長・大学院生命農学研究科長)



農学部同窓会会員の皆様、お元気で益々ご活躍のことと思います。卒業生の皆様が社会の多方面でご活躍されていることは、農学部・生命農学研究科の教員、職員にとって大変嬉しいことで、また心強く思うことでもあります。それに加え、農学部・生命農学研究科、さらには名古屋大学の応援団として、常日頃から教育と研究活動に対するご理解とご支援をいただいておりますことに、この誌面をお借りして改めてお礼を申し上げます。名古屋大学も国立大学法人となってもう4年が過ぎようとしていますが、以前にも増して大学を取り巻く環境にも急激な変化があるように感じています。そんな中でこの農学部・生命農学研究科におきましても嬉しかったこと残念だったことなど、いろいろなことがありました。この一年を振り返って近況をご報告したいと思います。

平成19年度から生命農学研究科として取り組む2つの大きな事業がスタートしました。マスコミ等で既にご承知のことと思いますが、一つは、グローバルCOEプログラムで、名古屋大学に生命科学分野の卓越した教育研究拠点形成するための5年間の事業です。これは理学研究科(生命理学専攻)と生命農学研究科との連携協力による事業で、ちょうど今年の今頃に計画を練って申請し、難関を突破して無事に採択に至ったものです。プログラムの名称は「システム生命科学の展開：生命機能の設計」で、副題の「生命機能の設計」には、理論やモデルに基づいて生命の本質を理解しようという理学的な目標と、生物を人為的に操って機能を最大限に発揮させようという農学的な目標の両方が込められています。それぞれの研究科の教育研究のミッションを明確にした上で連携協力してCOEプログラムを実施することで、理学・農学の

それぞれの分野での生命科学の先端研究を推進し、次の世代を担う優れた人材

の育成を目指そうというものです。組織的な活動の中心は人材育成のための大学院教育プログラムで、国際インターンシップなど、いくつかの斬新な試みを始められています。詳しくはホームページで公開していますので、ぜひご覧下さい。(<http://www.bio.nagoya-u.ac.jp/gcoe/>)

もう一つは、文部科学省からの特別教育研究経費という競争的資金(従来の概算要求予算に相当します)によるもので、鳥類の生命科学の研究を推進する5年間の研究プロジェクトです。名古屋大学農学部での鳥類研究の長い歴史と実績とともに近年の優れた研究成果が高く評価されて、この研究をさらに推進させるために特別に予算措置されたものです。課題名は「鳥類生命科学におけるポスト・ゲノム研究の展開－鳥類遺伝資源の多様性維持・開発と高次機能研究への活用－」で、この研究プロジェクトを着実に実施していくために平成19年4月に活動の中核となる「生命農学研究科附属鳥類バイオサイエンス研究センター」を発足させました(<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~abrc/>)。鳥類は動物性食料資源として優れた産業動物であり、また自然生態系の中でも重要な役割を担っていますが、哺乳類や魚類に比べて基礎的な研究が遅れていました。このプロジェクトでは、最近公開されたニワトリのゲノム情報とこれまでに農学部で維持・開発してきた鳥類遺伝資源を活用して、鳥類の生命科学研究の次のステップにチャレンジしようというものです。いずれの事業も、現在の名古屋大学農学部・生命農学研究科での高い水準の教育研究の基盤があって始めて

成し得るものであり、これを築いてこられた多くのOB/OGの教職員と卒業生の皆様に心から敬意と謝意を表します。今後とも引き続きご支援とご協力をいただきますようお願いいたします。

名古屋大学の平野眞一総長は平成20年度末に任期満了を迎えられ、本年末には次期の新総長も選出される予定です。国立大学法人化後の最初の評価を受け、第二期の6年間に向けての目標と計画の立案が始まります。名古屋大学は新たな節目を迎え、より優れた高

等教育・研究機関を目指して進んでいくことと思いますが、その中で、農学部・生命農学研究科も魅力的で存在感のある組織として発展することを期待しています。学外からの応援もどうぞよろしく願いいたします。最後になりますが、これまでの多くのご支援に感謝するとともに、皆様の一層のご活躍と同窓会の発展をお祈りし、同窓会報でのご挨拶とさせていただきます。

名古屋大学農学部同窓会長あいさつ

服部重昭 (林学科1970年卒)



農学部同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

昨年の6月に開催されました総会で会長をお引き受けして8ヶ月が過ぎました。これまでの活動を振り返りますと、総会で承認された事業計画に沿って、同窓会名簿・ホームページの管理、全学同窓会や農学部談話会の活動への協力などを進めてまいりました。また、会報「セコイア通信」の発行、卒業祝賀会および次期総会における講演会などについても準備を進めております。このように、事業は予定通り進んでおりますが、これまでの期間に限れば会員の皆様との接点が少なかったように感じております。これは、昨年10月に予定されていたホームカミングデイが、平成20年2月2日の豊田講堂の改修竣工式まで延期されるとともに、豊田講堂を中心にして実施されたこともあるかと思えます。

大学の法人化後4年が経過し、平成19年度には教育について大学機関別認証評価を受け、複数の基準について自己評価を行いました。そこでは大学と社会とのつながりを教育という観点からも分析する必要があり、たとえば学生の就職状況や企業での活躍なども大切な情報となります。そのような情報を適宜に収集するためには、これは前任の鈴木國夫会長もしばしば指摘されていたことですが、同窓会活動の活発化を目指した、大学と社会・企業などとの双方向の交流を深めることが必要であると思えます。できれば、同窓会の

活動が両者の情報交換や協働のパイプとして機能するようになればと考える次第

です。社会・企業などはいまどのような学生を求めているのか、とくに必要な知識、能力、技術、経験のレベルなど具体的なイメージ作りを可能にする生の情報の提供につながればと思います。このような情報や協働は、これからの法人評価や次期中期目標・中期計画の中で有効に利用されるものと考えます。

例年、名大祭の開催中に行われる農学部同窓会総会や秋に実施されるホームカミングデイへの会員の参加は必ずしも十分ではありません。より多くの会員の皆様が一体感を持って同窓会活動に注目し、参加していただけるように、同窓会の事業や活動を少しずつ見直して行く必要があります。すぐに妙案が浮かぶものではありませんので、現在の活動をベースにそれに工夫を加えることから始めたいと思います。そのため、同窓会の活動や運営に対する、より多くのご意見を吸い上げるシステムを考えることも必要です。研究分野によっては卒業生や修了生との連絡ネットワークや親睦会などを持っておられると聞いておりますので、そのような研究分野、講座との情報交換を通して新しい連携も模索してみたいと考えます。農学部同窓会の事業と活動への忌憚のないご意見をお待ちしておりますとともに、会員の皆様のますますのご活躍をお祈りいたします。

天然物有機化学・生物有機化学研究40年のあゆみ

生物有機化学 磯部 稔



名古屋大学に入学して45年になる。この3月で定年退職するので、この機会に歩んだ道を振り返ってみたい。私の少年時代は、物資に乏しいいわゆる戦後の貧しい日本に育った。生きるのに一生懸命の時代だったけれども、教育熱心だった親たちのおかげで勉強する環境は良かった。団塊世代の直前に生まれたために、定員増・校舎増築で運動場はいつも工事現場だった。大学でも農芸化学科を卒業するころ、食品工業化学科が増設され、B研究棟が増築された。

学部4年生の時に新設となった後藤俊夫研究室で、生物有機化学研究室初代卒論生として直接教授の実験指導を受けることができたのは良かった。卒業論文では、抗生物質グリフォリンの全合成を完成し、次いで海ホタルルシフェリン類縁体の合成と発光活性をまとめた修士論文は、1年半で完了した。次いでカイコ休眠ホルモン（卵休眠誘導物質 DH）の構造研究を開始した。大学院博士課程の途中で助手となった。1973年には DH の研究を博士論文としてまとめ、米国・ニューヨーク・コロンビア大学に博士研究員として2年間留学した。プロスタグランジン F_{2α} の全合成を達成して帰国したとき、岸義人助教授がハーバード大学に転出していたので、後藤研助教授の席に就いた。

留学先で習得した新しいカルバニオンの化学を展開し、構造の複雑な天然物質の立体制御全合成を中心として研究を進めた。抗ガン活性物質バーノレピンやメイタンシン全合成を行い、アルカロイドやポリエーテルの合成法を確立し、多様な分子の合成・取り扱い・分析法を研究した。後藤教授の急逝で1991年から生物有機化学研究室の第2代教授となり、有機合成研究と

ともに生物有機化学の研究も本格化した。カイコ卵休眠覚醒の分子機構・タンパク質脱リン酸酵素阻害剤とその機構・発光タンパク質と発光物質の分子機構・ナトリウムチャンネル阻害剤などなどの研究について研究を行ってきた。

17年間の磯部研究室では、国内外から共同研究で参加してくれた人々の貢献はきわめて大きい。スタッフ・院生・学部生に加えて、国内外の博士研究員や客員研究員の参加を得て常に30名ほどの研究室人口があった。その内訳は、スタッフ6名、学部生79名、大学院修士75名、博士後期過程28名、博士研究員（長期）名19名である。タイ王国からの中期客員研究員は20年で総勢52名に登り、外国人共同研究員8名を含めてリピーターが多い。論文提出による博士学位取得者も7名居る。このおかげで下級生は上級生から学び、他の研究室でトレーニングを受けた博士研究者と大学院生とが互いに影響し合うという絶好の研究・教育体制ができた。このように多くの優秀な共同研究者に恵まれたおかげで良い研究と教育への実績を挙げることができた。また、アジア（タイ・中国）を中心にヨーロッパからも多数の研究員がきてくれたおかげで、当研究室で新しい有機化学だけでなく国際感覚をも十分に育むことができた。

名古屋大学生命農学研究所とともに高等研究院・総合研究館で研究する機会をいただいた。名古屋大学には心から感謝する。

魚類松果体とともに40年

水圏動物学 大村百合

40年も慣れ親しんだ名古屋大学大学院生命農学研究科を去る時が来た。この間ほとんど、魚類松果体の組織形態学的研究に沈潜することができたのは、ひとえに農学研究科（後に生命農学研究科）の包容力のお陰であったと思う。研究のきっかけは、当時（1960年代後半）日長時間を調節してサケマス類の成熟・産卵を制御しようとする気運が日本のみならず世界的にもたかまっていたことや、光受容-メラトニン分泌器官である魚類松果体の成熟産卵機構における役割を解明したいという情熱が農学部水産学講座（現水圏動物学研究分野）にあふれていたことによると思う。

松果体は視覚器である眼とは比べようもないほど微小で、その細胞構築の研究はほとんど電顕に依存し、主としてアユやニジマスを用いて光受容細胞に焦点を絞って調べた。魚種によって松果体の組織形態学的特徴にはかなり差異があるが、光受容器としての基本的細胞構成は共通しており、光受容細胞は頭部に外節層板膜、基底突起にシナプスリボンを含み、神経細胞とシナプス結合を形成する。神経細胞の軸索は松果体神経をなして松果体柄を下り、分岐して脳のあちこちに投射する。

次に、光環境の変化に対して光受容細胞がどのような微細構造レベルの反応を示すかをブラインドケープフィッシュやウミメダカを用いて調べ、光受容細胞のシナプスリボンの長さや数が夜間暗順応状態では増加、昼間明順応状態では減少しさらに恒暗飼育でも昼間には減少するので、明暗条件よりもむしろサーカディアンリズムによっていることを明らかにした。また、養

鱒場や栽培漁業センターより入手したニジマスやアユ、さらにヒラメ等の受精卵を飼育し、松果体の光受容細胞が網膜のそれに先立って出現し、サーカディアンリズムの形成機構に深く関わっていること等も明らかにした。

1990年代半ばになって、マリアナ海溝の産卵場付近で採取されたウナギ仔魚の標本をもらったのがきっかけで、始めは網膜そして松果体の光受容細胞の新生の研究を推進することになった。ウナギの網膜では光受容細胞、特に桿体細胞がほぼ一生にわたって新生し続けることを明らかにし、さらにヒラメの網膜でも同様に桿体細胞の新生が続くことを確かめた。そこで、長年にわたって成長と産卵を続けるニジマスの松果体について調べると、仔稚魚や若魚のみならず成魚でも増殖細胞が豊富にみられ、その一部は確かに光受容細胞に分化していることを明らかにすることができた。

今やニジマスでは、日長時間を調節して成熟・産卵を制御し夏季の数ヶ月を除き採卵することが可能となっており、松果体がこの光情報の伝達経路の中で重要な役割を演じていることが以前にもまして強く示唆される。また、網膜や松果体にみられる光受容細胞の新生機構を利用し応用することも目標にしていたが、残念ながら時間切れである。世界的需要の増大による水産資源の枯渇や気候変動による食料不足の危機に対しても、ますます研究成果を積み重ねることによって解決されることを期待してやまない。



「ニワトリ研究の世界の先達となれ」を目指して

動物機能制御学 島田清司

同窓会の皆さん、私も定年退職を迎えることになりました。名古屋大学農学部にも勤めるようになって32年、周りの先生や学生のおかげで充実した研究教育に携わることができました。振り返ると「助手時代」は実験実習を通してがんばり、学生と直接、接する喜びを味

わいながら熱心にできたと思います。可能な限り教育効果をあげたいという意気込みがありました。「助教時代」は実習プラス講義を通してこれまた可能な限



り新しい知識や考え方を理解させたいという意欲がありました。初め慣れない講義のためか自分では気がつかないうちに、壇上机においた「ノートを見て、顔を上げて学生君を見て」の繰り返しだったらしく、その「米つきバツタ動作」を学生コンパでまねをされました。

昔、まだ教養学部があった頃5年間(1988-1992)、農学部1年生を中心に「生物学」を(2単位、古典遺伝学から分子遺伝学まで)教えたことがありました。受講生は200名くらいで、まだ週休2日制ではなくてこの科目は土曜日の朝8時半から始まりました。遠いところから通学する学生は大変だろうと思って聞いたことがありました。四日市駅まで30分くらいかけてバスで来て電車で名駅へきて地下鉄で本山へ来て本山から教室まで徒歩で来ているというたしか「山川君」とかいう学生がいました。何でも土曜日でも朝5時半には起きてるとかで妙に感心しました。今、「山川君」は35-6才でしょうか、きっと社会で大いに活躍していると思います。

教授になってからは多少なり余裕をもって講義をできるようにになりましたが、年齢とともに学生と接する時間が乏しく世代格差を感じるようになりました。昔は、20-30人の学生の名前と顔を一致させて授業第2週までには覚えていましたが、次第に大変難しくなりました。教育の達成感が薄れてきたこともありました。1つは学部改組によって教育目標が変化拡大したためでもあります。私の場合は畜産学科から資源生物環境学科への移行でした。しかし、研究面では長年、卒論や修論、博士論文製作にかかわり、一貫してニワトリ研究に全力を傾注してきました。このご挨拶の題

名「ニワトリ研究の世界の先達になれ」を目指して」は最終記念講演会で使いました。今から45年前、私が18才の時大学に入る時にある人からいただいた言葉です。その方は、孵卵場会社社長さんで当時の文部省にはたらきかけ寄付をされて岐阜大学に日本で初めての家禽畜産学科の創設に尽力されました。私はその会社から奨学金をいただき大学卒業後就職して将来を期待されてもいましたが、一方で自分としては研究教育に携わりたく思っていました。あのテーマをを可能にしてくれたところが名古屋大学であったと思いますし、その場をいただき研究教育を通じて社会奉仕できたことを深く感謝しています。

昨年度文部科学省「鳥類バイオサイエンス研究センター」が生命農学研究科に設立されました(松田幹研究科長が以前に同窓会ニュースでご紹介)。このセンターは、文科省特別教育研究経費(研究推進)(平成19-23年予定)に伴って設置されたものです。その目標は世界に冠たるトリ研究拠点にすることであります。名古屋大学農学部は設立以来、ニワトリを初めとする家禽の研究機関として国内外で高く評価されてきました。やはりこれは、先人の功績と現在在籍する教員協力のおかげであります。また、学生時代同窓生の皆様にも「野鶏・家鶏系統保存事業」(1952年に文部省事業として設立)としてお世話になったもので、その発展型として今日花開いた結果であります。定年前1年間でありましたが当センター長を勤めた立場から、今後のセンターの発展に向けて同窓会の皆様のご支援をお願いいたします。最後に、生命農学研究科のさらなる発展を期待致します。

名大農学部の同窓生として、そして教員として

動物形態情報学 福田勝洋

私は、平成8年7月に農学部に教授として赴任し、この3月で名大を去ります。動物形態情報学研究分野を担当し、資源生物環境学序説や動物組織形態学Iと言う基礎科目を持っていましたので、同窓生の多くの方とも関わりがありました。教授としての在職期間は11年9ヶ月ですが、私自身も名大農学部の卒業生で、昭和44年に修士課程を修了するまでの6年間で学部生、大学院生として在籍しました。

学生時代は、滝子、東山、安城の3キャンパスを流

浪し、4年生で再び東山に戻りました。滝子と安城での貴重な経験をした最後の学年になります。27年振り

に戻った名大ですが、私も24歳から51歳になっていました。周囲の樹の成長に経過した時の長さを思い、教養部がなくなるという大きな変化がありました。女子学生が増え、自転車が増えればかりでした。4年一貫教育のため、授業を追っての移動に自転車が必需品で、



農学部に不可欠のフィールド実習が夏休みに集中せざるを得ない状況となっていました。

関東地方で製薬会社、大学、農水省とわたり、教員として戻った私には、名大農学部には独特の思考体系があること、そしてそれが世間一般の常識とちょっと違うことを感じました。民主的といわれているものにも独善性を感じるがありました。

現在、改革の名の下に旧国立大学は大きく変容しようとしています。郷里や母校から遠く離れた地で活躍されている同窓の方々には母校名古屋大学はどのように映っているのでしょうか。中部地方の雄たる名大には将来の心配はないと思われるかも知れません。しかし大学内部では極めて高い危機意識をもっています。問題意識すらなかった以前と違い、名声ある大学ですら国際化や独自性で生き残りをはかる時代となっています。

大学の国際化、教養人の育成のためには、独善を排し、バランスがとれ、覇気にあふれた活力のある大学であるべきで、私がかつて在籍していたアメリカの大

学では、高いレベルを維持するため、アカデミアは outside people に、経済的な支援は alumni people によることを原則にしていました。アメリカのシステムがそのまま日本の大学に当てはまる訳ではありませんが一考に値します。日本では、教員の内部昇格を排していた大学も現在ではその制度を止めています。また、母校出身者 1/3、他大学出身者 1/3、他大学/機関を経験した自校卒業生 1/3 を教員構成の理想とする大学もあります。新たな血の導入による活性化をはかりながら、伝統を残し継承していく一つの方法かも知れません。大学が名声を得ることが卒業生に利するとは言え、同窓生の支援も一般の給与所得者には限りがあります。同窓生の中で企業家として成功した方々に頼ることになるのでしょうか。

私は間もなく定年退職により名古屋から離れた地で母校の将来をみていくこととなります。名大農学部・生命農学研究科が研究に加え、人材育成でも益々発展していけることを期待し、応援していきたいと思っています。

生命農学研究科に期待すること

園芸科学 山木昭平

私は1987年に農水省果樹試験場から名古屋大学に移って以来ほぼ20年になります。農学部の多くの方々にご指導頂き、無事に終了できることに大変感謝しております。この間大学には大きな変化が起きました。私が大学に来たときには、教育・研究に対して忙しいなりに余裕がありました。独法化に向けての変革は大学の教育・研究および組織運営に大きな混乱を与えました。この様な中で農学部の理念についても時代を先取りしたものに変革されてきました。21世紀における農学の目指すところは、1998～2000年の大学院重点化の中で明確に示され、現在の生命農学研究科の礎石となっています。そこには「地球との共生をめざして 一人類の食、環境、健康を探究する」とあります。この理念に基づいて様々な教育・研究がなされ、それなりの人材を社会へ輩出でき、成果も上がりつつあり、一定の評価は出来ると思います。一方、昨今、世界的に生じている問題は農学分野と大きな関わりを持ってあります。食糧生産、地球温暖化、バイオエネルギー、バイオマス利用、食の健康志向、食の安

全など、どれも人類の生活に無視できない重大な課題であり、いずれも農学分野が中心となってその解決

に向かってリードして行かねばならないものばかりです。その意味でも21世紀はまさに農学の時代であると思います。しかしながら私が少々危惧するのは、この様に農学分野が多様化するなかでこれらの様々な問題に一定の対応が出来る、いわゆる農学のジェネラリストが名古屋大学農学部卒業生には少ないことでもあります。学外のNPOなどに関係していると痛切に感じます。この様な問題の解決は大学だけで出来るわけではなく、民間、官庁、大学、すなわち産学官が協力してはじめて現実の解決策が生まれてきます。そこで必要とされる人材はこれら全ての問題について一定以上の見識を持ち、産学官をコーディネート出来る人材です。名古屋大学生命農学研究科は研究レベルが高いと評価され、各分野に優秀なスペシャリストを多数輩出してきました。それが本研究科の特徴となっているこ



とは事実だと思います。その反面、農学のジェネラリストが少なく農学が多様化した今日では弱点になっていると思います。ジェネラリストとはスペシャリストが様々な経験を積んで成長してなるとの意見もあります（これまでのジェネラリストはそのように育ってきた）。しかし、これだけ問題が多様化し、スピードが早くなった現在では今までのような育成法では追いつかないし、今までの方法であればジェネラリストは年寄りばかりになり、インパクトに欠けることとなります。早急に、農学のジェネラリストを育成する方策を検討し、人材育成の目標の1つとして取り上げるべき

だと思います。21世紀は農学の時代だといえるに相応しい農学のジェネラリストが誕生することを生命農学研究科の皆様にご期待致します。長い間お世話下さりまして有り難うございました。

定年退職技術職員

今年度はこのほか1名の技術職員の方が定年退職されます。井上絹代さん。長い間技術支援ありがとうございました。

平成20年度名古屋大学農学部同窓会 総会、講演会、懇親会のご案内

農学部同窓会総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。みなさまお誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。講演会、懇親会への参加も歓迎いたします。

○期 日：平成20年6月7日（土） *名大祭期間中*

○総 会

時間：午後2時～3時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○講演会

(株) 東芝 社会システム社 水・環境システム事業部

小西 千晶 氏 一第23回（平成3年3月）林産学科卒一

「電機メーカーが取り組むバイオマス事業

～異分野の技術を融合し、新しい市場に挑戦～」

時間：午後3時～4時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○懇親会

時間：午後4時～6時

場所：名古屋大学シンポジオン内 ユニバーサルクラブ

会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会総会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか？ 農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、ホームページを掲示板としてもご利用頂けます。

卒業生の言葉

卒業を迎えて

資源生物環境学科 動物形態情報学研究分野 伊藤 真祥



クイズ番組出場者と(右端が著者)

名古屋大学に入学して早くも4年が経ち、まもなく卒業を迎えることとなりました。あっという間に過ぎ去った大学生活。ふり返るとたくさんの思い出が頭の中を駆けめぐります。実行委員として名大祭の運営に携わったり、友人と旅行をしたり、某クイズ番組への出場を果たしたりと、書ききれないほど多くのことに挑戦しました。積極的に色々なことに取り組みないともったいないと思い、欲張りすぎて失敗もしましたが、それも含めて充実した4年間だったと思います。

これでは課外活動ばかり頑張っていたように聞こえますが、もちろん本業のほうも頑張った……つもりです。特に3年生以降はコース別のカリキュラムになり、最も興味を抱いていた動物分野を重点的に学ぶことができ、講義や実験実習に力が入りました。4年生でのセミナーや卒業研究では先生や先輩方に支えられながら、さまざまな物事の考え方や1つのテーマを徹底的に追求することの面白さを知りました。初めて英語の論文を読みきったときの達成感や、実験が上手くいったときの興奮は忘れがたい思い出です。

大学での4年間で課外活動や勉強を通じ、「自分で考え、決定し、実行した事に責任を持つ」ことの大切さを学びました。私はこの4月から就職し社会人としての一歩を踏み出します。社会に出ると、これまで経験したことのない場面がいくつも待ち受けていることでしょう。どんなに険しい状況でも自分の責任で乗り越えなければなりません。しかし臆することなく、この4年間での経験を自信に変えて立ち向かっていこうと思います。

最後になりましたが、この4年間本当に多くの方々を支えられてきました。つまらないことにも付き合ってくれた友人、未熟な私をご指導くださった先生、先輩方、そして陰ながら見守ってくれた家族への感謝の言葉を持ちまして卒業に向けた言葉に代えさせていただきます。ありがとうございました。

卒業を迎えるにあたって

応用生物科学科 土壌生物化学研究分野 小木曾 拓也



研究室のメンバーと(真ん中が著者)

このたび名古屋大学での4年間の学生生活を終え、卒業できることを心から喜ばしく思います。4年前に名古屋大学に入学し、卒業を迎えるまでに様々なことがありました。特に環境分野における社会情勢の変化は著しく、地球環境保全がひとつの重大なテーマとなっています。これに関連し、温暖化を筆頭とする諸問題の解決が、農学を学んだ私たちに求められていると感じます。

大学入学以前、私は環境問題について漠然としか捕らえていませんでした。しかし、在学中の講義を通じ、現在の問題について体系的に把握できました。また、4年生になってからは土壌生物化学研究室に配属され、そこでのセミナーを通じて土壌、特に水田という側面からこれらの問題についてより深く考察することができました。その上で、自分のすべきことは何かを考える機会をいただけたと思います。特に卒業研究は地球温暖化に関与する因子の解明について、小さくはありますが貢献できる研究内容であり、とてもやりがいを感じました。

研究においては毎日が知らないことの連続で、その度に文献を調べ、あるいは教官や研究員、院生の方からご指導を頂くことで日々成長でき、密度の濃い時間を過ごせました。一方で、研究を始めてからは自分に足りない部分が見えてきて何度も落胆することがありました。足りない部分を補うために、自分なりに課題を探しましたが、それを克服することは困難であり、うまくいかない事の連続でした。そんな中で、友人をはじめ、様々な方から助言を頂き、解決の糸口を見つけることができました。このような恵まれた環境に居られることを幸せに思うとともに、私も周りの方々の助けとなれるように更なる努力が必要と感じます。今も克服すべき課題は多いのですが、ひとつひとつ乗り越えていけたらと思います。

最後になりましたがこの場をお借りしまして、4年

間私を支えて下さった方々に感謝をささげたいと思います。私に大学で学ぶ機会を与えて下さった両親、共に学び、一緒に楽しい時を過ごした友人、御指導いただいた教官の皆様、その他多くの方々のおかげで私は今まで頑張っていたのだと思います。

卒業後は大学院に進学し、同研究室にお世話になる予定です。まだまだ足りない部分はありますが、自身の欠点を克服できるよう、また、新しく配属される新4年生の手本となれるよう、今後ともさらに学業に専念し、社会に貢献できるよう精進していきたいと考えます。

2年間を振り返って

生命農学研究科 生命技術科学専攻 植物細胞機能研究分野 筒井 悠



私は他大学から大学院へ進学したため、名古屋大学では2年間しか大学生活をしていませんが、とても中身の濃い2年間でした。今の研究室へ来て最初に驚いたことは、実験設備が充実していることです。こんなにも良い環境で研究ができることに高揚したことを今

でも鮮明に覚えています。しかし、それまでの研究とは少し専門が違っていたこともあり、最初は苦勞の連続でした。睡眠時間を削って勉強をするなど、とにかく必死でしたが、研究室の皆さんのサポートもあり安心して研究を続けることができました。今では実験について周りの人から助言を求められるようになりました。また、外部の研究所まで実験しに行ったり、タイ、チュニジア、韓国の方々と接する機会があったりと、こちらに来て世界観が広くなりました。

自分に余裕ができてからは、ハンドボールのクラブチームに参加し、大好きなハンドボールを続けています。他大学から進学したため知り合いが少なかった私にとって、このチームで高校生から社会人まで幅広い年齢層の人たちと接することができたことは、とても貴重な経験でした。

名古屋大学へ来るまでは、大きな壁にぶつかることなく、それなりに色々となしてきましたが、それ故に考える力に欠けていました。ここへ来て、研究について、自分について、人間関係について、将来についてなど多くのことを考えるようになりました。振り返ってみると、名古屋大学へ進学して充実した設備の中で研究ができたことも今後の糧になると思いますが、それ以上に人間として成長できたことに喜びを感じています。

最後になりましたが、この充実した2年間を過ごすことができたのも、熱心にご指導して下さいました先生方をはじめ、お世話になった方々、クラブチームのメンバー、そして家族の支えがあったからです。壁にぶつかったことで、人の温かさに触れることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成19年度農学部同窓会 総会、講演会、懇親会、ならびに 農学部第3回卒業生の卒業50周年記念祝賀会報告

平成19年6月9日(土)、農学部第3講義室に於いて総会を行いました。例年通り、平成18年度の事業・



決算報告、平成19年度の役員選出と、平成19年度事業計画・予算を審議しました。総会終了後、加藤保氏(愛知県農業総合試験場)による講演「明日の愛知県農業を拓く、農業総合試験場の実用化研究」を開催しました。講演終了後、シンポジウム内「ユニバーサルクラブ」にて懇親会を開催し親睦を深めました。

同日、名古屋大学農学部大会議室に於いて、農学部第3回卒業生および大学院農学研究科第1回修士卒業生の卒業50周年記念祝賀会を、農学部談話会と共同で開催しました。平成17年に名古屋大学農学部第1期生の卒業50周年を記念して始まったこの祝賀会は、今回

新たに大学院の第1期修了生も加え、14名の卒業生と約20名の談話会会員、約15名の現職員ならびに同窓会役員が出席して盛大に行われました。祝賀会では、瓜谷郁三名誉教授より安城市の旧農学部跡地への記念碑建設の報告に続き、第3回卒業生の柴田猛氏による講演「海苔について」も行われ、互いの旧交を温めておられました。

農学部第4回卒業生の
卒業50周年記念祝賀会のご案内

農学部第4回卒業生（昭和33年3月卒業）の皆さんが、平成20年3月に卒業50周年を迎えられます。この良き年を記念して、農学部談話会にもご協力いただき、第4回卒業50周年記念祝賀会を開催いたします。懐かしい先生方にもご参加頂けることと思っておりますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

第3回卒業生のみなさんからの寄稿

「第3回農学部卒業50周年記念祝賀会に参加して」

農芸化学科・第3回卒業生 田中教利

祝賀会にお招き頂き大変感謝しております。

先の平成18年11月安城市で行われた農学部創設発展記念碑除幕式にも参加させて頂きましたが、私共が在学中に特にご指導頂いた農芸化学科の瓜谷先生はじめ皆様の壮健なお姿を拝見し、また同じ時に卒業した仲間とも会うことが出来て、懐旧の念に駆られました。また、先生方と一緒に写していただいた写真はいい記念になります。ありがとうございました。

懇親会の後では、近くの街に繰り出し二次会の形で農化3回生の有志による懇親会を行うことも出来ました。農化3回生18人は五七会を結成して、年3回（年始、春、秋）会合を続けていますが、東京からの1人を含め、11名が参加出来ました。（物故者1人、療養者2人）

祝賀会に先立ち行われました第16回農学部懇談会にも参加させて頂き、この時、同期・3回生の柴田君の記念講演を聴くことも出来ました。また総会では講演会や農学部の活動状況や変遷（これはセコイア通信などでA3判程度の大きな表でお示しいただくようお願いいたします）、母校の発展振りなど色々な知見が得られました。今後も継続されるようお願いいたします。

誠に充実した一日を過ごすことができました。このような機会を提供して頂いたことを関係各位に改めて御礼申し上げ、皆様のご発展を祈念し、お礼と感想とさせて頂きます。

「卒業50周年記念祝賀会に参加して」

農芸化学科・第3回卒業生 細井 力

はじめに、遠い昔に卒業した私ども第3回卒業生を祝賀会にご招待いただき、会運営に携わった多くの

方々に、厚くお礼申し上げます。

私ども3回生は、学部二年間を牧歌的な雰囲気の漂うあの安城学舎で過ごしたので、東山キャンパスは馴染みの薄い場所ですが、立派な研究棟をはじめ、周辺の樹木の豊富さや土地の高さなど学園として素晴らしい場所だと思います。

祝賀会では、瓜谷先生をはじめ諸先生方ならびに第1回卒業生の先輩方にお会いでき大変懐かしい思いをいたしました。また2006年11月の農学部創設発展跡地の碑設置の経過説明がありました。私は2000年2月にたまたま安城の地を訪れた時、元学舎の跡地を訊ねようと思いつき安城総合公園に立ち寄ったことがありますが、その変貌ぶりに驚くとともに、思い出になるものが何もなく大変寂しい思いをいたしました。そのようなことで、跡地の碑設置は安城学舎を知る者にとって大変意義深く、記念すべきものだと思います。

記念講演の「海苔について」は製造技術から業界の状況や地球温暖化の影響などにかかわった問題におよび興味深いものでした。

総会では、農学部の学科や教室について過去50余年間の変遷の調査報告があり、農学部の歴史を見る思いがしました。また愛知県農業総合試験場長加藤保氏の講演は、農業技術の開発・応用について豊富な実例と総計資料を基に分かりやすくご説明いただき、まさに農学の原点を見る思いがしました。

最近のニュースには地球環境の問題が欠かせませんが、エタノールなど代替燃料の開発やPCB等有害物の無毒化、温暖化対策などに見られるように、地球環境と農学との関係は今後ますます重要になってくると思います。そのような意味で時代とともに農学部が変化し、新しい農学を学んだ人達が出、社会に出た人達が社会での実践情報を農学部を持ち寄って学部に反映する。このようなサイクルを円滑に回すためにも、同窓会や談話会は必要であり、あって欲しいと思います。

祝賀会、講演会、懇親会の模様、また記念碑建設に関する情報などは農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) に掲載中です。是非ご覧下さい。

平成19年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧

(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行われています。)

○「海外派遣」

徳本雄史 (森林生態生理学研究分野・学部4年)

課題等 マレーシア熱帯雨林での乾燥実験下におけるフタバガキ科樹木の花から実生までのデモグラフィック解明

人事異動 (平成19年1月～12月まで)

					生命農学研究科
日付	内容	職名	氏名		備考
1月1日	採用	助手	柴田 貴広		
2月16日	昇格	助教授	吉田 正人	助手から	
3月12日	死亡	教授	北川 泰雄		
3月31日	退職	講師	大浦 由美	和歌山大学へ	
"	定年退職	教授	平嶋 義彦		
4月1日	採用	准教授	大蔵 聡	(独) 農業生物資源研究所から	
"	"	"	山本 直之	日本医科大学から	
"	"	助教	小林 美里		
"	昇格	教授	佐々木 康寿	助教授から	
"	"	講師	村瀬 潤	助手から	
"	兼務	評議員	服部 重昭	21.3.31まで	
"	"	副研究科長	服部 重昭	"	
"	"	生物圏資源学専攻長	竹中 千里	20.3.31まで	
"	"	生物機構・機能科学専攻長	川北 一人	"	
"	"	応用分子生命科学専攻長	大澤 俊彦	"	
"	"	生命技術科学専攻長	北島 健	"	
"	"	生物環境科学科長	土川 覚	"	
"	"	資源生物科学科長	海老原史樹文	21.3.31まで	
"	"	応用生命科学科長	小俣 達男	"	
"	"	応用生物科学科長	中野 秀雄	"	
"	"	総長補佐	東村 博子	20.3.31まで	
"	"	研究科長補佐	土川 覚	"	
"	"	"	小鹿 一	"	
"	"	鳥類バイオサイエンス研究センター長	島田 清司	"	
"	配置換	教授	並河 鷹夫		
"	"	准教授	齋藤 昇		
5月1日	採用	助教	竹本 大吾		
"	"	"	小谷 亜由美		
6月1日	"	"	富岡 利恵		
11月1日	"	教授	畑 信吾	京都大学から	
					生物機能開発利用研究センター
4月1日	兼務	評議員 (センター長・連合2群)	小林 迪弘	21.3.31まで	
8月1日	昇格	教授	芦 莉 基行	准教授から	
					農学国際教育協力研究センター
2月16日	採用	助教授	榎原 大悟	(独) 国際協力機構から	
4月1日	兼務	センター長	山内 章	21.3.31まで	

事務局だより

会員の方の「自分の出身研究室が、どのように変遷してきたかが解ると助かる」との声にお答えして、同窓会ホームページに研究室変遷の表を公開しました。今後もセコイア通信ならびに同窓会ホームページを通じて、会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしていきたいと考えております。

平成18年度 事業報告

1) 総会、講演会、懇親会の開催

平成18年6月3日(土)名古屋大学農学部において総会を行った。

総会終了後、松本博紀氏(農林水産省 生産局畜産部畜産振興課課長補佐)による講演「BSEの発生と動物性副産物のリサイクルについて」を開催した。

講演会終了後、名古屋大学シンポジオン内「ユニバーサルクラブ」にて懇親会を開催し、親睦を深めた。

2) 卒業祝賀会の開催

平成19年3月23日(金)に農学部談話室にて卒業祝賀会を開催した。

3) 会報「セコイア通信」の発行

平成19年3月に発行した。

4) ホームページの作成と管理

同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかった。平成19年3月発行のセコイア通信を掲載した。

5) 同窓会名簿の管理

全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努めた。

6) 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し運営に協力した。

平成19年度 事業計画案

1) 総会、講演会、懇親会の開催

平成19年6月9日(土)名古屋大学農学部において総会を行う。

総会終了後、加藤保氏(愛知県農業総合試験場)による講演「明日の愛知県農業を拓く、農業総合試験場の実用化研究」を開催する。

講演会終了後、名古屋大学シンポジオン内「ユニバーサルクラブ」にて懇親会を開催する。

2) 卒業祝賀会の開催

平成20年3月25日(火)に農学部談話室にて卒業祝賀会を開催する。

3) 会報「セコイア通信」の発行

平成20年3月に発行する。

4) ホームページの作成と管理

同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかる。平成20年3月発行のセコイア通信を掲載する。

5) 同窓会名簿の管理

全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。

6) 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。

名古屋大学同窓会 平成18年度決算

【収入の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	3,127,000	永久会費	2,200,000	110名
		一般会費	510,000	102名
		寄付金	387,000	79名
		広告掲載費	30,000	2件
卒業50周年祝賀会・談話会会費	72,000			36名
総会懇親会費	73,000			73名
その他	668,601			創設発展記念会余剰金・利子
前年度繰越金	24,717,945			
合計	28,658,546			

【支出の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,128,932			
総会	262,568	總會支給交通費	86,000	3名
		懇親会	170,000	
		通信・印刷費	6,568	
卒業50周年祝賀会	78,091			
卒業祝賀会	179,625			
役員報酬	264,000	平成17年度分	132,000	11名
		平成18年度分	132,000	11名
支部支援金	200,735	平成17年度分	90,000	
		平成18年度分	110,000	
		振込手数料	735	
重複会費返還	1,858,887	返還金	1,820,000	
		通信・印刷費	38,887	
アルバイト代	250,000			
郵便振替手数料	32,890			
その他諸費用	123,206	旅費	92,000	
		その他事務経費	31,206	
次年度繰越金	24,279,612			
合計	28,658,546			

名古屋大学同窓会 平成19年度予算

【収入の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	3,620,000	永年会費	3,000,000	150名
		一般会費	500,000	100名
		寄付金	60,000	20名
		広告掲載費	60,000	4件
卒業50周年祝賀会・談話会会費	50,000			25名
總會懇親会費	50,000			50名
その他	100			利子等
前年度繰越金	24,279,612			
合計	27,999,712			

【支出の部】

費目	金額(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,500,000			印刷・発送
総会	234,333	講演料	33,333	
		總會支給交通費	41,000	
		懇親会	150,000	
		通信・印刷費	10,000	
卒業50周年祝賀会	200,000			
卒業祝賀会	200,000			
役員報酬	132,000		132,000	11名
支部支援金	140,000	関東支部	60,000	
		関西支部	50,000	2万円増
		遠州会	30,000	H17、18年度分含む
アルバイト代	250,000			事務
郵便振替手数料	50,000			
その他諸費用	100,000	旅費	50,000	
		その他事務経費	50,000	
余剰金	25,193,379			
合計	27,999,712			

関東支部だより

関東支部長 朱宮 正剛 (畜1964年卒)

関東支部は、数年おきに支部総会を開催し、平成19年2月23日(金)に第12回関東支部総会と講演会を学士会館で開催した。総会では、規約(第6条)により支部長が再選され、幹事として犬飼初男(畜1964年卒)、石川靖文(食化1975年卒)、伊豫田敏宏(畜1984年卒)、森光康次郎(食化1987年卒)、木村知文(農化2002年卒)、黒川晶範(応M2004卒)、相談役として仙石三郎(農化1955年卒)、彌富耿彦(農1962年卒)、鈴木國夫(農化1966年卒)の方々のご承認をいただいた。

講演会では、農学部同窓会会長の鈴木國夫氏に「名大農学部同窓会と全学同窓会の近況」および名古屋大学大学院教授の大澤俊彦氏に「疾病予防と機能性食品」についてご講演いただいた。

講演後、参加者31名が講師を中心に、旧交を温めながら、大学の法人化と産学連携、同窓会のあり方等について語り合うことができた。今回は昨年3月に国立科学博物館筑波実験植物園を定年退職された八田洋章氏(農M1968年卒)も参加いただき、植物園観察会、樹形研究会の活動などについてのお話をうかがうことができた。

しかし、残念ながら今回の同窓生参加者は31名で過去最低であった(表)。仕事の上でも人生においても同窓会は新しい出会いの場となる。若い人達の参加を切に望みたい。

メールアドレスの登録、更新は下記をお願いします。

連絡先：朱宮正剛(名大農同窓会関東支部 支部長)

電子メールアドレス：shumiya@sepia.ocn.ne.jp

TEL & FAX：03-3811-9759

住 所：〒112-0002 東京都文京区小石3-22-1

関西支部だより

関西支部長 加藤 寿郎(農1968年卒)

平成19年度の名古屋大学農学部同窓会関西支部総会を、11月17日に開催いたしました。今回で第三回となります。一人でも多くの方にご参加いただくよう、ほぼ600名の方に案内状をお送りし、また、一部の方にはEメールやお電話で参加をお願いいたしました。30名の方のご参加を目標といたしましたが、残念ながら目標には達しなかったものの、昨年より多い19名の方にご参加いただき、盛会裏に総会を終えることが出来ました。次回は必ずや30名の大会へと闘志を燃やしています。

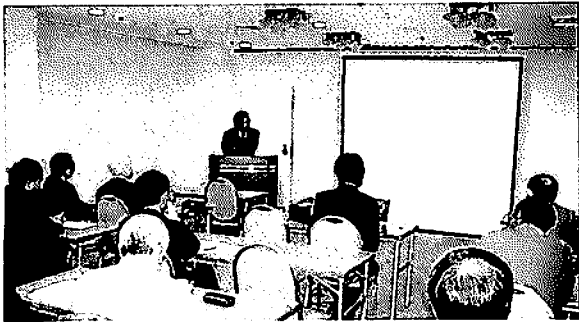
総会議事を終えた後、今年は欲張って2名の方にご講演をお願いしました。「名古屋大学の現状について」を生物機能開発利用センターの北野英己先生からお話いただき、また、「地球温暖化対策と植林・バイオマス利用」と題して、環境テクノスの沖森泰行様(昭和56林)にお話いただきました。北野先生からは独立法人化後の様変わりとなった大学の状況や、ご専門のイネバイオリソースの開発と研究への応用について、熱弁を振るっていただきました。大学の運営もなかなか大変だなあ、と改めて感じ、また、イネについては、多収米の話など大変面白く、資源の少ない日本ですから、地味ではあるけれど、遺伝子の保護と活用は大切だとの印象を深くしました。沖森さんのお話は、昨今、大きな話題となっている地球温暖化問題ですが、炭酸ガス排出削減や排出権獲得をめぐる、国際的に様々な動きがある中で、沖森さんが渦中の人として活躍されておられる様子をお話いただき、興味深く聞かせていただきました。今後、更に事態が動くでしょうから、沖森さんには次回の総会に、その後の動きをお伺いし

	開催日	場 所	講師：講演テーマ	費用・参加人数
第1回	77.11.19	豪華(新宿)	江崎孝三郎：実験動物について	会費5,500、参加者34名
第2回	79.3.31	豪華(新宿)	芦田 淳：大学改革について	会費6,000、参加者40名(38+2)
第3回	82.11.27	コロナビル(品川)	森 博士：ロボットのお話し	会費3,500、参加者46名
第4回	85.10.12	国際文化会館	平井篤志：注目のバイオテクノロジー～高等植物の細胞融合による光合成機能を高める有用生産物(澱粉、蛋白質、油脂等)の増産は可能か～	会費6,000、参加者43名(42+1)
第5回	90.11.16	学士会館	柴田 勝：バイオテクノロジー植物育種への応用	会費6,500、参加者59名
第6回	92.11.14	ホテルスワ	施設見学：農業生物資源研究所、果樹試験場、畜産試験場、食品総合研究所、森林総合研究所、熱帯農業研究センター	会費8,000(観光バス利用)、6,000(自家用車)参加者56名
第7回	95.12.1	学士会館	山下興亜：農学部の研究の現状とこれから	会費7,000、参加者37名(36+1)
第8回	98.12.4	学士会館	青山博昭：内分泌攪乱物質の最新の情報 並河鷹夫：変貌しつつある農学部の近況	会費8,000、参加者45名(43+2)
第9回 (中止)	01.7.14	KKR HOTEL TOKYO (旧竹橋 会館)	芦田 淳：農学部50年の歩み 巽 二郎：50周年事業報告 並河鷹夫：農学部の近況	会費10,000、参加者46名(予定)
第10回	02.2.2	学士会館	長谷川峯夫：鶏卵の加工と利用 竹谷裕之：農学部同窓会活動の近況-50周年記念事業を終わって-	会費10,000、参加者49名(48+1)
第11回	05.2.25	学士会館	竹谷裕之：法人化後の農学部・生命農学研究科と同窓会活動の近況 加藤巖夫：都市住民にとっての森林とは	会費8,000、参加者39名(37+2)
第12回	07.2.23	学士会館	鈴木國夫：名大農学部同窓会と全学同窓会の近況 大澤俊彦：疾病予防と機能性食品	会費8,000、参加者32名(31+1)

たいと思っております。

講演を聞かせていただくだけでも十分面白い会ですが、ご講演のあとは、お酒も入った立食パーティーを行いました。今年は、講演が2題あったこともあり、午前11時から午後3時までと、少し長い時間をとりましたので、ゆっくりと歓談していただけたと思います。途中、お一人ずつ、自己紹介と最近の様子などお話しいただき、和気あいあいとして、とっても盛り上がった会となりました。世話役と致しましても、大変感謝いたしております。

さて、平成20年度は、11月15日(土)と決まりました。時間は、お昼の時間を挟んでの時間帯と致したく思います。場所は、大阪淀屋橋の三井ガーデンホテルB1です。今回は、中井昭彦様(昭和30農)に「ランのお話」を、また、龍谷大学工学部の宮浦富保先生(昭和61林D)に「里山学」をお話いただくことになっておりますので、ご期待ください。いずれ、ご案内を差し上げますが、是非ともご参加をお願いいたします。初めての方も、一度覗いてみてください。



名大遠州会だより

遠州会農学部幹事 米屋武文(食D1980年満了)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に在住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校の出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、総会を隔年で開催しています。平成19年は、第12回同窓会を5月26日(土)18時にオークラクトシティホテル浜松のレストラン「フィガロ」に73名の会員が集い、名古屋から平野名大総長・伊藤全学同窓会代表幹事を来賓にお迎えして開催しました。来賓のご両人には、同窓会に先立って、会場に隣接の楽器博物館を見学していただきました。

同窓会は、乾 会長の挨拶に続いて、平野総長およ

び伊藤代表幹事にスピーチをいただいて懇親会に入りました。アトラクションとして、地元で活動中の女性三人のグループ「歌鳥風月」の演奏がありました。チャイナドレスでの電子大正琴を中心にフルート、クラリネット、キーボードと歌による、ナツメロや十二楽房のヒット曲等の演奏に会場の雰囲気は盛り上がり、ナツメロでは出席者も一緒に口ずさみました。最後は、三谷副会長の挨拶と三三七拍子で20時50分に閉会しました。

さて、本年度は第6回総会、第13回同窓会をグランドホテル浜松の孔雀の間にて6月7日(土)17時30分に開催予定です。アトラクションには浜松医科大学学生による室内楽を予定しています。

巷間では、大学卒業生の大学への帰属意識が希薄で、むしろ卒業した高校を通じた繋がりの方を重視する傾向があるとの報道に接しました。名大遠州会も若い会員の参入が少ない状況で、50代なかばの私でも若手の類いです。役員会では、出席会員の層を広げるための方策を話し合っ、女性会員の声をもっと反映しようとか女性・若手の会費を安くしたりといったことを具体化していますので、奮ってのご参加をお願いいたします。

なお、各会員へのご案内は、4月20日頃の発送を予定しております。

連絡先：遠州会農学部幹事 米屋武文

〒430-8533 浜松市中央2丁目1-1

静岡文化芸術大学文化政策学部

Tel/Fax 053-457-6174

Email : yoneya@suac.ac.jp



名古屋大学全学同窓会ニュース

1. 「名古屋大学基金」の創設

名古屋大学が昭和14年に創設されてから、平成21年で70周年を迎えるに当たり、記念事業の一つとして「名古屋大学基金」が創設されました。これは名古屋大学の基本理念を達成、発展させるための資金で、ご寄附いただいた寄附金を積み立て基金とします。この基金は(1)教育・研究環境整備事業、(2)学生育英事業、(3)国際交流事業、(4)その他として産学連携や社会貢献活動の支援などに有効に活用されることとなります。農学部同窓会にも協力の依頼がきております。この基金につきましては全学同窓会のホームページ (<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp>) に詳細が載っておりますので、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

2. 海外支部の設立

名古屋大学ではアジア諸国を中心に世界各国からの多くの留学生が学んでいます。卒業、修了後も名古屋

大学とのつながりを継続的に維持するため、2005年度から海外支部の設立が進んでいます。現在、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナムに支部があり、活動が行われています。今後も新しい支部設立の動きがあります。

3. 豊田講堂竣工記念ホームカミングデイ

平成20年2月2日(土)に豊田講堂改修竣工式に合わせて、ホームカミングデイが開催されました。改修された豊田講堂で午前中に記念式典、午後からは記念パーティとトークセッションが行われ、立ち見が出るほどに盛況でした。豊田講堂の正面からの概観に変化はありませんが、客席はゆったりとして快適性が増すとともに、とくに1階客席は電源やLANシステムの使用も可能で機能性も向上しました。また、隣接していたシンポジオンとの間に屋根が架かり、大きくて明るいホワイエ(アトリウム)空間が創設され、雰囲気が変わりました。大学にお越しの折には是非一度ご覧ください。なお、平成20年度のホームカミングデイは10月18日(土)の予定です。

平成19年度 役員名簿

名誉会長	松田 幹 (研究科長)	会 計	近藤 稔 (森林資源利用学)
会 長	服部 重昭 (森林資源利用学)		井上 直子 (動物形態情報学)
副 会 長	板谷 精三 (学外)	名 簿	武田 真 (植物細胞機能)
関東支部	朱宮 正剛 (学外)	ホームページ	山田 邦夫 (園芸科学)
関西支部	加藤 壽郎 (学外)	会 報	佐々木康寿 (生物材料工学)
総 務	新美 友章 (器官機能)	事 務	宮田 久代 (生殖科学)
	村瀬 潤 (土壌生物化学)		(敬称略)

北川泰雄先生を偲ぶ

新美友章 (器官機能研究分野・食1991年卒)

本学大学院生命農学研究科教授、北川泰雄先生におかれましては平成19年3月12日、脳神経疾患のため急逝されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和44年京都大学農学部をご卒業後、京都大学大学院農学研究科博士課程にご進学され、昭和50年に農学博士の学位を授与されました。同年、名古屋大学農学部の助手となられ、平成2年には助教授にご昇任、平成5年には名古屋大学農学部教授になられ、平成11年からは名古屋大学大学院生命農学研究科教授として、高いご見識とお人柄により、教育と研究に多大な貢献をされてきました。

先生の研究は多岐に渡り、研究人生の後半に着手された、「脂肪組織由来幹細胞の培養技術の開発」は、名古屋大学医学部との共同研究により再生医療分野への臨床応用が進展しており、この技術を利用した様々な研究の先鞭をおつけになられました。先生は日本動物細胞工学会会長、日本農芸化学会中部支部長など

を務められ、多くの学会活動に参画されました。また、学内におかれましても名古屋大学生物分子応答研究センター長や名古屋大学大学院生命農学研究科生物情報制御専攻長を務められ、大学の管理運営にも多大な貢献をされました。一方で、英国企業に大学院生を派遣する「派遣型高度人材育成プラン」の代表として、新たな大学院教育の創成を目指されました。

ご定年まで3年あまりを残されてのご逝去は、誠に惜しみてあまりある痛恨事であり、先生の元気なお姿を思うにつけても全く信じがたいことでもあります。ここに同窓会を代表して、心から先生のご逝去を悼み、生前の輝かしい成果と研究・教育への情熱に対し、限らない敬意と感謝を申し上げます。

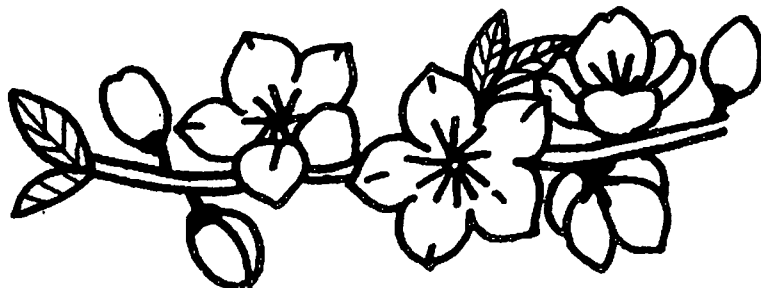


同窓会寄付者一覧

本年度、農学部同窓会に対し以下の方々より寄付金を頂きました。ありがとうございました。

(敬称略)

浅井 武重	浅黄 将吾	足立 明人	雨木(渡辺) 郁子
雨木 若慶	石原 紋子	磯田 幸男	井上 忠彦
今井 清起	今井 資大	磐城 洋介	大島 光昭
大野 麻菜美	大橋 偉郎	勝山 陽子	加藤 熙
加藤 忠太郎	加藤 壽郎	加藤 元保	加藤(芦名) 保子
金田 和子	印牧 美佐生	粥田 嵩	川口 悦男
川島 直通	菊池 裕之	九島 昌彦	小林 良
才木 孝	佐藤 安久	柴田 敏郎	柴田 勝
菅原 知宏	杉浦(磯村) 克己	鈴木 徹	館本 勲武
田中 克英	多和田 悦嗣	寺本 昭二	中川 俊次
中村 久美子	中村 恵章	成瀬 和也	仁科 一哉
野村 康雄	筈見 信善	長谷川 洋吉	原 睦美
原田 尚子	飛田 恭平	人見(大村) 英里	広田 知敬
古田 隆則	松崎 敦志	松本(寺島) 正	水野 薫
溝口 保宗	森 耕太	山下 興亜	山下(水野) 貴子
山竹 葉子	山田 耕司	山田 悟	吉田(松本) 康
和佐田 裕昭	渡辺(平野) 美子	渡辺 泰男	

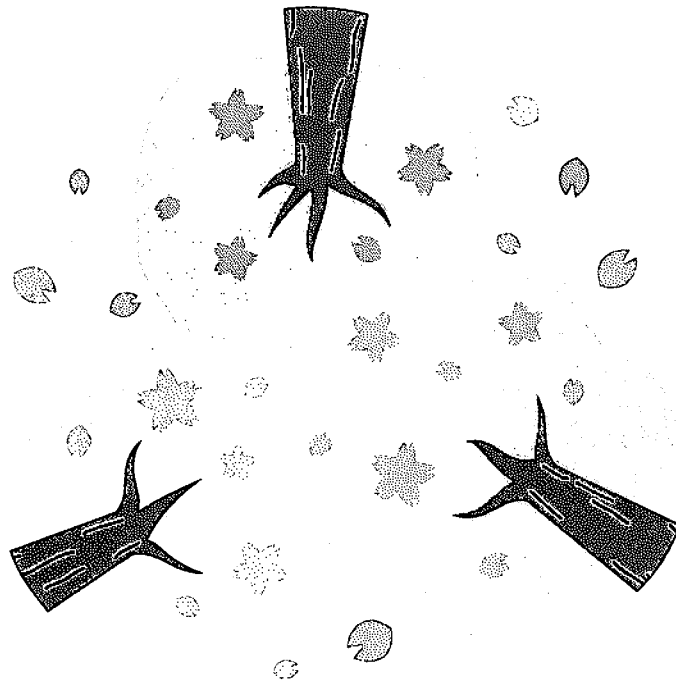


農学部の話題 —2006.12.16 ~ 2007.12.15—

(「名大トピックス」より許可を得て農学部関係の一部を記載)

- 大沢俊彦・生命農学研究科教授と国立長寿医療センター研究所の共同研究で、魚の脂と大豆食品を多く摂取すると認知症の予防になる可能性が分かった 1.10 (水) 中日 (夕刊)
- 「新春・森づくり講演会」27日開催：只木良也・本学名誉教授が講演 1.18 (木) 中日 (朝刊)
- 南方熊楠賞に伊藤嘉昭・本学名誉教授が選ばれる 2.14 (水) 中日 (朝刊)、朝日 (朝刊)
- 名大サロンの主役：前多敬一郎・生命農学研究科教授 繁殖力より食いが強い 2.20 (火) 中日 (朝刊)
- 男女共同参画室主催「科学しようよ！」2月10日開催：東村博子・生命農学研究科助教授らによる3つの公開講座が開催 計100人の女子中高生が参加した 2.26 (月) 中日 (朝刊)
- 東村博子・農学研究科助教授と山田俊児さん・本学大学院生らのグループが授乳が生殖機能を抑制するというメカニズムを解明 3.9 (金) 中日 (朝刊)
- 第44回読売農学賞 山木昭平・生命農学研究科教授「果実の糖集積・品質向上機構に関する生理・生化学的研究」 3.19 (月) 読売
- 中日文化センター：特別講座「ジョン・ギャスライトの自然塾—遊びの森&癒やしの森」エコロジスト・ジョン・ギャスライトさん・本学大学院生が講義 3.19 (月) 中日 (夕刊)
- 「理系白書—シンポジウム in 東京」2月25日開催：東村博子・生命農学研究科助教授「女性を生かし活性化を」 3.20 (火) 毎日 (朝刊)
- 山木昭平・生命農学研究科教授が読売農学賞を受賞 4.6 (金) 読売
- 青井啓悟・生命農学研究科教授、松見紀佳・生命農学研究科准教授、中村菜美子・本学大学院生はカレー色素のクルクミン生分解性プラスチックを作成することに成功 6.9 (土) 日刊工業
- 本学 男女共同参画室 理系を目指す女子中高生向けに、「理系女性のワーキングスタイル」を作製 同室長・東村博子・生命農学研究科准教授は、「理系が好きなのはためらわず志してほしい」と呼びかける 6.12 (火) 中日 (朝刊)
- 松見紀佳・生命農学研究科准教授らの研究グループは、クルクミンから生分解性プラスチックを開発 6.25 (月) 日経産業新聞
- 紙上ゼミナール：竹谷裕之・生命農学研究科教授 食のリスクに正しい理解を 8.21 (火) 中日 (朝刊)
- 佐藤豊・生命農学研究科准教授と東京大学のグループが、イネの茎や葉の成長点を制御する遺伝子を発見 9.1 (土) 朝日 (朝刊)、中日 (朝刊)、9.3 (月) 日刊 工業
- 紙上ゼミナール：竹谷裕之・生命農学研究科教授 安全な食を支える社会の仕組みを 9.4 (火) 中日 (朝刊)
- 市民に開かれつつある学会 日本植物生理学会広報委員の石黒澄衛・生命農学研究科准教授は「研究資金の大部分は税金。その成果を話すことは時代の要請」と話す 9.13 (木) 中日 (夕刊)

- 「食の安全・安心」をテーマに「消費者懇談会」開催：竹谷裕之・生命農学研究科教授 10.12 (金) 中日 (朝刊)
- ジョン・ギヤスライト氏が生命農学研究科博士課程修了 “木登り博士” となる 10.13 (土) 中日 (朝刊)
- 日本繁殖生物学会学術賞 生命農学研究科准教授 大倉 聡 10.21 (月)
- 第32回鳥類内分泌研究会 若手研究奨励賞 生命農学研究科、日本学術振興会特別研究員 中尾 暢宏
11.16 (金)
- 社会人 my キャンパス：コラムニスト・ジョン・ギヤスライト氏・本学卒業生
海渡り “本立て” の国へ 12.7 (金) 中日 (朝刊)
- 平成19年度「ビタミンの日」講演会13日開催：堀尾文彦・生命農学研究科教授
「ビタミンと健康」 12.9 (日) 中日 (朝刊)
- 「わさびフォーラム」10日名古屋のホテルで開催：大澤俊彦・生命農学研究科教授 12.11 (火) 読売



理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具
主要取扱メーカー

久保田製作所	トミー精工
東京理化	タイテック
マリソル	日本エイド
佐久間製作所	岩城硝子
三洋メティカ	アトバンテック
三立科学	アト



株式会社 みずほ理化

〒468-0066 名古屋市天白区元八事1丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117

理科研はバイオ研究に欠かすことのできない
試薬・機器の販売を通じ

人類の幸せと豊かな社会の実現を願っています



<http://www.rikaken.co.jp>

- 本社 名古屋市守山区元郷二丁目107番地
〒463-8528 TEL 052-798-6151(代) FAX 052-798-6157
- 岐阜営業所 岐阜県岐阜市岩地2丁目25番2号
〒500-8225 TEL 058-240-0721(代) FAX 058-240-1082
- 津営業所 三重県津市丸之内菱正町20番地14号
〒514-0036 TEL 059-224-6661(代) FAX 059-224-6671
- 四日市営業所 三重県四日市市桜町2129番の1
〒512-1211 TEL 059-326-0231(代) FAX 059-326-3577
- 静岡営業所 静岡市駿河区広野3丁目29番8号
〒421-0121 TEL 054-256-3751(代) FAX 054-256-3755



あらゆる素材の切削加工を提案します。

工業用機械刃物の総合メーカー

兼房株式会社

本社・工場 愛知県丹羽郡大口町中小口1-1 〒480-0192
TEL (0587)95-2821 FAX (0587)95-7225
<http://www.kanefusa.co.jp>
E-mail sales-do@kanefusa.co.jp

支社・営業所 名古屋・東京・大阪
札幌・仙台・広島・福岡

研究設備・分析機器・光学機器・分析器具

主要特約代理店

オリンパス	三洋電機
ヤマト科学	GEヘルスケアバイオサイエンス
トミー精工	アプライドバイオシステムズ
旭テクノグラス	アズワン

合資会社 木下理化

〒466-0035
名古屋市昭和区松風町1丁目32番地の3
TEL (052) 859-2132
FAX (052) 859-2136

木と人の家具

karimoku

刈谷木材工業株式会社

〒470-2193
愛知県知多郡東浦町緒川申新田40-3
TEL 0562-83-4111(代) FAX 0562-83-6699
<http://www.karimoku.co.jp>

コミュニケーションの進化に対応する



印刷を核に情報産業を担う企業として、
新時代のコミュニケーションの輪を
拡げています。

- 本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL(0566)24-5511/FAX(0566)26-0200
- 名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区松田町19-20
TEL(052)871-9190/FAX(052)889-1410

農学部同窓会事務局では、広告の募集をしてお
ります。本会報の発行部数は、現在約7,300部で、
本学農学部関係者に配布されています。会社の広
告、同窓会の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。